

李頎詩「聖善閣送裴迪入京」考 —王維や裴迪の詩との関連に注目して—

内 田 誠 一

A Study of Li Qi's Poem "Shengshange song Pei Di rujing": Focusing on
the Relations to Wang Wei's and Pei Di's Poems

Seiichi UCHIDA

書道学科, 文学部,
安田女子大学

要 旨

盛唐の詩人・李頎の詩「聖善閣送裴迪入京」は、洛陽の聖善寺の報慈閣において、長安へ行く裴迪を送った送別詩である。この作品は全十二句から成る五言排律。十二句のうちの五句において、王維や裴迪の詩を踏まえて作られていることが判明した。また、五句のうちの四句は押韻すべき偶数句に置かれている。まさに意図的であると言わざるを得ない。

ではなぜ、李頎はこのような手法を用いたのであろうか。それは、長安へと向かう裴迪を力づけようとしたからであろう。詩意から想像するに、裴迪は嘗て尚書郎に任官するも、疾病ゆえに官を辞したようである。ところが、身体的に（あるいは精神的に）脆弱にも拘わらず、官界への未練があったのか、再起を期して長安へ上ることになった。出発を前にして、聖善寺の報慈閣を舞台に催された送別の宴。その主催者と思しき李頎が、長安には王維がいるから何の心配も要らぬ、という激励のメッセージを込めて、若き裴迪にこの詩を贈ったと考えてよいであろう。

キーワード：唐詩、洛陽、李頎、王維、裴迪

一、序

李頎の「聖善閣送裴迪入京」という五言排律は、洛陽の名刹・聖善寺において、長安へ行く裴迪を送った送別詩である。この作品を仔細に見ていくと、全十二句の中の五句が、王維や裴迪の詩を踏まえて作られていることに気づく。このことは、これまで指摘されてこなかったようである。本詩と王・裴の詩との関連に注目しながら、詩の内容を分析したい。また、何故かくも多くの王・裴の詩を踏まえる必要があったのか。この点についても考察してみることとする。

二、李頎と「聖善閣送裴迪入京」詩について

李頎（690～751〈754〉）は盛唐の詩人。字号は未詳。河南潁陽（現在の河南省登封市南部）の人。中年まで潁陽に隠棲していたが、開元23年（735）、進士に及第。新郷県尉となるも数年で官を辞し、潁陽の東川別業に隠棲。七言古詩・七言律詩に優れ、王維・高適・王昌齡・綦毋潜らと交友した。作品は、その没年頃に成立した殷璠『河岳英靈集』に十四首収載されており、生前より名声が高く、かつ編者殷璠の青睞を得たことが知れる。また道教を好み、恒山の張果や嵩山の焦煉士などの道士とも交流し、煉丹修道を實踐していた。

さて、本稿で取りあげる「聖善閣送裴迪入京」詩（以下、「聖善閣」詩）の舞台である聖善閣は、洛陽の聖善寺にあった報慈閣を指す。聖善寺は後に白居易が『白氏文集』を奉獻した寺院としても知られる。鄭虔「聖善寺報慈閣大像記」に「自頂至頤八十三尺、額珠以銀鑄成、虚中盛八石」とあり、巨大な仏像が安置されていた。「聖善閣」詩は、長安へと上る裴迪の送別の会が慈報閣において開かれた際に作られた送別詩と考えられる。

松原朗「仏寺集会詩の出現—開元二九年の洛陽の出来事」¹⁾によると、開元末年に江寧丞として南京に赴任する王昌齡のために、洛陽の白馬寺で送別の宴が催され、「仏寺における送別詩＝送別の場における仏寺詩」が作られた。この文会を主導する立場にあったのは恐らく李頎で、盛唐期の重要詩人として洛陽詩壇において特別な位置を占めていたと松原氏は推測している。そして、洛陽で始まった仏寺集会詩が王昌齡によって長安の王維にもたらされたと云う。本稿で考察する「聖善閣」詩も、同論文において「仏寺集会詩」の中に挙げられている。

次に、詩の本文と訓読とを示し、校記を付す。

聖善閣送裴迪入京

（聖善閣にて裴迪の京に入るを送る）

- | | | | |
|----|-------|--------------|-------------|
| 1 | 雲華満高閣 | 雲華 | 高閣に満ち |
| 2 | 苔色上鈎欄 | 苔色 | 鈎欄に上る |
| 3 | 葉草空階静 | 葉草 | 空階静かに |
| 4 | 梧桐返照寒 | 梧桐 | 返照寒し |
| 5 | 清吟可愈疾 | 清吟して | 疾を愈すべく |
| 6 | 携手暫同歎 | 携手して | 暫らく歎びを同じくす |
| 7 | 墜葉和金磬 | 墜葉 | 金磬に和し |
| 8 | 飢烏鳴露盤 | 飢烏 | 露盤に鳴く |
| 9 | 伊流惜東別 | 伊流 | 東を惜しみて別れ |
| 10 | 灞水向西看 | 灞水 | 西に向かひて看る |
| 11 | 旧托含香署 | 旧と含香の署に託したれば | |
| 12 | 雲霄何足難 | 雲霄 | 何ぞ難しとするに足らん |

校記

第一句の「雲」は、明『唐五十家詩集・李頎集』では「雪」に作る。「雪華」は雪の意。語義

が本詩の季節や時間と合わない²⁾。「雲華」には「ちぎれ雲」「雲母」などの意味があるが、ここでは「雲光（雲間から漏れ出る太陽の光）」即ち「薄明光線（光芒）」という意味にとると落ち着きがよい³⁾。

同じく第一句の「満」は、王安石『唐百家詩選』、計有功『唐詩紀事』、劉成徳『唐李頎集』では「斂」に作る。「斂」（あつめる、おさめる）では落ち着きが悪いように思われる。

第九句の「流」は、王安石『唐百家詩選』、計有功『唐詩紀事』、劉成徳『唐李頎集』に「川」に作る。写本転写の際に「流」の字の行書体の右下の部分を見て「川」の字に見誤った結果と思われる。

三、王維や裴迪の詩を踏まえて作られた句について

さてこれから、王維や裴迪の詩を踏まえた表現について分析していきたい。王・裴の詩を踏まえていると考えられる句は、第二句、第四句、第六句、そして第七、八句（対句）である。

まず第二句の「苔色上鉤欄（苔色 鉤欄に上る）」であるが、これは王維の五言絶句「書事」詩の後半二句を踏まえている。

軽陰閣小雨 軽陰 小雨を閣（ふく）み
 深院昼慵開 深院 昼 開くに慵し
 坐看蒼苔色 坐して見る 蒼苔の色
 欲上人衣来 人衣に上り来たらんと欲するを

この詩は通行本の趙殿成『王右丞箋注』の外編に収載されており、日本では殆ど問題にされていない。真偽不明の作を扱うことに躊躇する、日本人特有の慎重な態度の現れともいえよう。李頎のこの詩では、以下縷縷述べるように、王維や裴迪の詩句を踏まえた句が多い。よって王維の「書事」詩は、少なくとも王維グループの詩人たちが諳んじていた作品（即ち王維の真作）であった、と考えてよいのではないか。

また、李頎が「坐看蒼苔色、欲上人衣来」の二句を踏まえて「苔色上鉤欄」と詠じたきっかけも、実は同じ「書事」詩の第一句「軽陰閣小雨（軽陰 小雨を閣む）」にあるように思われる。ここでの「閣」は「軽陰（淡い雲）」が微雨を含んでいることを言う。李頎が、聖善閣とそれを取りまく大気や光の状況を描写しようとして「雲華満高閣」と詠じ、さて次の句は王維の詩句を踏まえようとしたと仮定する。第一句末の「閣」から、使われている意味は違うにせよ、「書事」の「軽陰閣小雨」がふと脳裏を掠めたのではないか。

王維は第一句に「軽陰（淡い雲）」、第三句に「苔色」、李頎はそれを踏まえて第一句に「雲華」、第二句に「苔色」を、それぞれ用いている。こう考えてくると、李頎詩の第一句の始めの二字は、やはり「雲華（雲間から漏れる日の光）」に違いなく、「雪華（ゆき）」ではあるまい。

なお、王維の「（蒼苔の色が）人衣に上り来たらんと欲す」というのは、もちろん現実の描写ではない。湿度感あふれる蒼い苔の色彩のエネルギーを感じ取った王維は、その色が自分の衣を染めてしまうような感覚にとらわれたのであろう。王維の「山中」詩（この作品も趙本の外篇に収載）にもこれと似たような表現がある。「山路元無雨、空翠湿人衣（山路 元と雨無きに、空

翠 人衣を湿す)」—山路にはもともと雨も降っていないのに、滴るような木木の翠が衣を濡らすように思われる⁴⁾。

強烈な色彩を視覚で感じ取り、その感覚が皮膚感覚と交流・融合したのであろう。ほかならぬ「共感覚（シナスタジア / synesthesia）」⁵⁾である。しかしながら、李頎にはそのような特殊な感覚が無かったのであろう。「坐看蒼苔色、欲上人衣来」を踏まえても、「苔色上鉤欄」—苔の青い色が曲欄にまで這い上って（生えてきて）いる—という現実描写に終わっている。

第四句「梧桐返照寒」は、「輞川集」に収められる裴迪「茱萸泝」詩の第三、四句「雲日雖回照、森沈猶自寒（雲日 回照すと雖も、森沈として猶ほ自から寒し）」を踏まえていよう。「回照」と「返照」は同義である。夕方（あるいは夕方近くに）日の光が樹木にあたって寒々としている、という裴迪の表現は、実は王維流のもの。王維の名詩「過香積寺」に「泉声咽危石、日色冷青松（泉声 危石に咽び、日色 青松に冷ややかなり）」とある。

李頎は「葉草空階静」と薬用植物の植わったきざはしの辺りを詠じた時、次は裴迪の詩をふまえようと考えたのであろう。同じく植物が植わっている様子を詠じた「茱萸泝（茱萸の岸）」詩の後半部分が思い浮かんだと推測される。即ち「雲日雖回照、森沈猶自寒」—またしても「雲」。李頎がこの裴迪の詩句を思いだしたのは、夕暮れ時で斜日が「回照」していたこともあろうが、まずもって、聖善閣の黄昏の空には雲が多かったからに違いない。

では、裴迪の詩句を典故とした句を作るのに、李頎はなぜこの「茱萸泝」を選んだのであろうか。それは、十代の裴迪が、王維と輞川荘の景勝の地をめぐるって作った作品の一つだからであろう。この詩を踏まえた句を作って、王維の指教の有難さや王維との宿縁の強さを裴迪に思い起こさせようとしたのではないか。

次に第六句「携手暫同歡」であるが、これと似た句が王維の「贈裴迪」詩の第五句に見える。

- | | |
|---------|-------------------|
| 1 不相見 | 相ひ見ず |
| 2 不相見来久 | 相ひ見ずして来たること久し |
| 3 日日泉水頭 | 日日 泉水の頭にて |
| 4 常憶同携手 | 常に憶ふ 同（とも）に手を携へしを |
| 5 携手本同心 | 手を携へて 本とより心を同じうす |
| 6 復嘆忽分襟 | 復た嘆く 忽ち襟を分かつを |
| 7 相憶今如此 | 相ひ憶ふこと 今 此くのごとし |
| 8 相思深不深 | 相ひ思ふこと 深きや深からずや |

李頎の「携手暫同歡」と王維の第五句「携手本同心」を比較すると、「携手+（副詞）+同+（名詞）」という構造が同じである。王維の詩句を踏まえていることは明白であろう。王維の詩では直前の第四句にも「同」と「携手」が用いられている。句末の語「携手」をしりとりのようにして次の句頭に置くのは、古詩に見られる技法。

裴迪は王維の友人裴迥⁶⁾の遺児とされる。裴迥亡きあと、王維が親代わりとして裴迪を撫育したものである。それは裴迥の遺言によるものかもしれない。裴迪が十代のころ、二人は、輞川の地で山水を愛でつつ詩を詠じ合ったわけである⁷⁾。ところが裴迪が官職についたので、「忽

ち襟を分かち（突然、離れ離れになる）」ことになったのであろう。

この「贈裴迪」詩は、長安の王維から洛陽の裴迪に手紙とともに送られてきた作かもしれない。詩の内容からすると、書いて手ずから贈ったものではあるまい。詩題は王維の没後に詩集を編んだ際につけられたものであろう。本来ならば、「寄裴迪」とすべきものではあるまいか。

第七、八句「墜葉和金磬、飢鳥鳴露盤」は、現存する王維集で「過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若」という題で知られる寺院詩（七言律詩）の頷聯の対句を踏まえて作られている。この王維詩の「嵩丘蘭若」は嵩岳寺を言う⁸⁾。その対句とは「食随鳴磬巢鳥下、行踏空林落葉声（食は鳴磬に随ひて巢鳥下り、行は空林を踏みて落葉声あり）」である。王維のこの対句にある「落葉」を「墜葉」、「鳴磬」を「金磬」、「巢鳥」を「飢鳥」というように、李頎はそれぞれ同じような詩語に置き換えている。そして、「鳴磬」の「鳴」の字を「飢鳥」が「鳴」くに用いている。

李頎がこの詩句をわざわざ踏まえているのは、裴迪が王維に随ってこの嵩岳寺を参詣したことがあったからかもしれない。王維の「過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若」の詩から、王維自身が嵩岳寺住持の乘如禪師（蕭和尚）とその兄の蕭居士と仏教的交流を行っていたと知れる。乘如禪師と蕭居士に王維を引き合わせたのは、嵩山の南の潁陽に生まれ育った李頎である可能性も考えられよう。松原朗氏によれば、李頎は「盛唐期の重要詩人の一角にあり、洛陽の詩壇において特別な位置を占めて」おり、「李頎が家居する嵩山の東南一帯の「東溪（東川）」は洛陽の官僚たちの別業が多く分布する地域であり、この地を舞台に李頎は彼らと幅広く交流」していたのであった⁹⁾。

さて「聖善閣」詩の中で、王維や裴迪の詩を典故とした五句のうちの四句が、すべて偶数句の韻字を含む句であった。これには、王・裴の詩を典故とする句を偶数句に置くことによって、特に強調しようという意図があったのではないか。朗誦吟詠する際には、韻字はやや長めに誦詠されるので、聴く側の印象に残りやすいことが指摘できよう。第二句、第四句、第六句に王・裴の詩を踏まえた句を布置し、第七句第八句にも念を入れるかのように、王維の対句を典故とする対句を置いている。まさに意図的としか言いようがない。ではなぜこのような特殊な手法を用いたのであろうか。

四、李頎が王・裴の詩を踏まえて詩を詠じた理由

(1) 詩中の「葉草」と「愈疾」について

李頎が王・裴の詩を典故とする句を多く織り込む手法を用いた理由を考察するにあたり、まず詩中の「葉草」「愈疾」の語義について解釈を試みたい。第三句から第六句に「葉草空階静、梧桐返照寒。清吟可愈疾、携手暫同歡」とある。送別詩として、特に気になるのが「葉草」と「愈疾」である。「葉」や「疾（やまい）」は、本来、送別の詩には盛り込むべきものではなく、やや違和感を覚える。なぜこの二つの語を用いたのであろうか。

先行研究における葉草の解釈については、「寺院に植うるもの多し」（積清潭）¹⁰⁾ や、「芍薬の植込み」として「芍薬や牡丹」と注を加えている（前野直彬や斎藤茂）¹¹⁾ ものがある。いずれも聖善閣の辺りの情景描写としてとらえている。

「清吟可愈疾」の句については、「少しの頭痛などは愈えそうにある」（服部南郭）¹²⁾ とするものや、この南郭の解釈を襲い「心が「サッパリ」として、頭痛なども愈える」（簡野道明）¹³⁾ と

したり、「平日の俗塵も一洗することができる」（藤原楚水）¹⁴⁾と訳したりするなど、疾病とはいえぬ軽いものとする解釈がある。その一方で、「疾病」と解釈する説もある。「首二聯状閣之荒涼、因言裴之清吟可愈我疾」と、作者李頎の病とする（唐汝詢）¹⁵⁾ものがある。また反対に、「清らかに詩を吟ずれば、身の病いも心のやまいも、いやされる思いがする」（目加田誠）¹⁶⁾とするものや、「君の病気をなおすこともできよう」と訳した上に、「愈疾」の語について「病気をなおす。この言葉から見れば、裴迪が職を離れていたのは、病気のためだったのかもしれない」と注を加える（前野直彬）¹⁷⁾ものがあり、裴迪の病気について詠じていると解釈している。

現代中国では、歴代、『唐詩選』が尊重されてこなかったことからこの詩の訳注は稀である。劉宝和は「薬草空階静、梧桐返照寒」二句を「皆閣中所見景色」、「清吟可愈疾、携手暫同歡」二句を「別時深厚友情」として、「薬草」「愈疾」には特に注意を払っていない¹⁸⁾。

「聖善閣」詩の末二句に、「旧託含香の署、雲霄何足難」とある。これにより、裴迪はもともと「含香署」即ち尚書省に尚書郎として任官していたことが知れる。しかし何らかの理由で辞職し、長安から洛陽へ転居したのである。その裴迪が、また官職を求めるために長安へと上って行くのであった。李頎はその裴迪に「旧と含香の署に託したれば、雲霄 何ぞ難しとするに足らん（あなたはもともと尚書郎であったし、長安にはあなたを引き上げてくれるお方もおられる。高い地位が約束されているのだから、自信をもって長安へお行きなされよ）」と激励している。

詩の流れを考えると、「薬草」「清吟」→「愈疾」→「同歡」→「雲霄」がポイントとなろう。「薬草」「清吟」→「愈疾」の流れから、裴迪は病気がちか宿痾があったことが推測される。さきに挙げた目加田、前野両氏の解釈が妥当であろう。「薬草」も単なる情景描写ではなく、聖善閣で栽培されている薬草（疼痛を和らげる芍薬か？）を貰ったことを暗示しているのかもしれない。裴迪の病を癒すための薬草と捉えたほうがよいであろう。薬草を煎じて身体的な面を癒し、清吟によって精神的な面を癒す、とすると腑に落ちよう。そして離別前のしばしの交友をともに喜び、明日、裴迪は長安へと上ることになった。そして李頎は、君はきっと「雲霄（高位）」を得るだろう、と元気づける。このように捉えるならば、極めて自然な流れとなるであろう。

さきに挙げた前野直彬氏の指摘のごとく、裴迪は病気のために尚書郎を辞していたとするのが妥当であろう。よって「聖善閣」詩は、再起を期して長安へと赴く裴迪を送った詩と見なすべきと思われる。しかし、その後の裴迪は官界で大成したとは考えにくい。やはり肉体的あるいは精神的な疾病によって、官僚生活を全うしにくい状況にあったのかもしれない。

(2) 王・裴の詩を典故とする句を多用した理由

尚書郎を辞して洛陽で不遇をかこっていた裴迪の庇護者は、恐らく李頎であったろう。でなければ、ここまで王維や裴迪の詩を踏まえた句を多用して、送別詩をものすこともなかったと思われる。王維にとって裴迪は亡友の忘れ形見であった。裴迪亡きあと、王維は裴迪の親代わりとして、裴迪の科挙及第を目指して教育に当たっていたと考えられる。それは、裴迪十代の時に輞川二十首を同詠させて、王維自身の作とあわせて「輞川集」としたことからも充分推測されよう。

王維がどれほど裴迪の教育と将来について腐心していたか、それは李頎がよく認識していたはずである。裴迪の洛陽での生活の面倒をみてほしいとの依頼を王維から受けていたことも考えられよう。また、長安に獵官活動へ赴くのは、王維の勸奨もあったのかもしれない。

このような状況下において李頎は、裴迪との別れにあたって、万感胸に迫るものがあったに違いない。裴迪を激励する気持ちや慈愛の心がこの詩にあらわれるのは当然のことであろう。裴迪

にとって、長安に上ってから最も信頼できる最大の庇護者は王維であったことは言うまでもない。李頎も当然そのことを理解していた。だからこそ、王維の詩、そして裴迪が王維と輞川で唱和した詩を踏まえた多くの句を、この「聖善閣」詩に織り込むことによって、「長安には摩詰さんがいるから何の心配もいらぬ」（摩詰は王維の字）、と元気づけているのではあるまいか。もしかすると、裴迪は蒲柳の質の上に、精神的に弱い面があったのかもしれない。それならば猶更のこと、王・裴の詩を踏まえた句を何度も織り込んで、力づける必要があったに違いない。

また李頎の側としてみれば、自分はきちんと裴迪の教育・庇護を果たしたということ、王維にアピールする意図があったのかもしれない。「以心伝心」「言わぬが花」の日本人とは全く異なり、中国人にとっては言葉や文章ではっきりと自己を主張し、意思疎通を図る行為は重要であるからである。

ただ、王・裴の詩を踏まえた句を織りこんだことが、後世では理解されず、この詩は重視されない原因ともなった可能性がある。『刪定唐詩解』巻24において、呉昌祺が『墜葉二句插入未佳、細玩亦無喻意』と評していることから、それは容易に推測し得るであろう。

五、結 語

「聖善閣」詩は、仏寺における集会での送別詩であり、李頎と裴迪との交流を表す作品として価値のあるものであろう。王維や裴迪の詩を踏まえた詩句が五句も織り込まれており、王維と裴迪、王維と李頎との交流関係を表している作品とも言えよう。さらに、裴迪が身体的ないしは精神的疾病によって尚書郎の官を辞して長安から洛陽に移り、また官僚としての再起を期して長安へと上る際に、李頎が裴迪の病身を労りつつ激励につとめた作品であることも注目される。

とすると、この作品はかなり多くの情報を含んだ貴重な資料とも言えるのではないか。一説に、裴迪はのちに蜀に赴き、杜甫とも交流したとされる。杜甫が裴迪なる人物に送った詩が残るが、その人物が「聖善閣」詩を贈られた裴迪と同一人物か否かについては即断できないと思われる。これに関しては今後考察を進めていくこととしたい。

注

1. 『中国詩文論叢』第38集（中国詩文研究会、2019年）
2. 簡野道明氏は市川寛齋の説に反駁して「詩は理屈ばかりで解釈は出来ないばかりでなく、雪華満は閣の高いことを形容したので少しも差支ないのみでなく、末句に雲霄の字があって雲の字が重複する嫌もあれば、寛齋の説は必ずしも従ふことは出来ない」（『唐詩選詳説 上』（明治書院、1996年85版、490頁）とする。内田按ずるに、中国の詩は、詩情の裏に必ず理が存在しよう。第一句は決して「雪」ではない。また「雲」の字が重なる点であるが、律詩や排律で同字重出は決して珍しいものではない。
3. 目加田誠氏は市川寛齋の説を挙げつつ、「雲華としても意味は通じにくい。やはり「雪」字のままで、高樓に消えのこる雪であろうか」（『新釈漢文大系19 唐詩選』（明治書院、1997年45版）とする。『重編国語辞典』（商務印書館、1982年六版）では、「雲華」の項の語義の②で「雲的光華」とし、「聖善閣」詩の「雲華満高閣」を例に挙げている。薄明光線は秋から冬にかけて早朝や夕方に見られ、欧米では「天使のはしご」と俗称される（『旧約聖書』に由来）。高く聳える報慈閣に、雲間より光が放射状に降り注ぐ神秘的な現象を見た李頎は、高位へと昇ろうとする裴迪にとっての「吉兆」と考えたのかも知れない。
4. 『漢辞海 第3版』（三省堂）では「空翠」の第二義として、この「山中」を用例として「青くしめった霧」としているのは、やや疑念がある。「書事」も「山中」も、たしかに前提として湿度の高さがあ

- るのだが、少なくとも王維の「空翠」は青い霧ではあるまい。王維は色彩感（視覚で捉えた植物のみどり色）と湿度感（皮膚感覚で捉えた湿度）の融合したものを感知していた、と思われるからである。
5. 筆者は嘗て、〈クオリア（感覚質）〉〈共感覚〉という視点から王維の作品をとらえたことがある。静永健・川平敏文編「王維のクオリアを探る—「輞川集」にみる〈光と音の交錯する世界〉」（『東アジアの短詩形文学 俳句・時調・漢詩』、勉誠出版、2012年）
 6. 裴迥は登封の高陽観に残る豊碑「大唐高陽観紀聖徳感応之頌」（李林甫の撰文、徐浩の書丹）の篆額の筆者である。裴迥も徐浩も王維の友人であることが興味深い。
 7. 王維の「山中与裴秀才迪書」という書信でも、「多思曩昔、携手賦詩、歩仄逕、臨清流也」と用いられている。これは書信であるから、内容を他人が知ることはないかもしれない。しかし、この書信が『王維集』に記載されているということは、仲間うちでは知られた内容であった可能性も考えられる。とすれば、李頎が裴迪と聖善閣の庭園を歩きつつ、また閣上に登りつつ詩を吟じたとき、李頎自身も同じように裴迪と文学的交流を行なっていることを自覚し、「山中与裴秀才迪書」の「携手賦詩、歩仄逕」の部分をも想起したかもしれない。
 8. かつて筆者内田は、嵩岳寺に残る石刻「蕭和尚靈塔銘」を实地調査、文献調査を行ない、石刻の碑側に刻された詩の題名は、現存する『王維集』に見える詩題とは異なることが解った。また、詩題中の「嵩丘蘭若」が嵩岳寺であること、「蕭和尚靈塔銘」の蕭和尚がこの詩で詠じられている乗如禪師と同一人物であることなど、数多くの事実が判明した。「蕭和尚靈塔銘」に関する拙論の中で主たるものに次のようなものがある。「蕭和尚靈塔銘」の碑文について—王維・王縉兄弟との交流を物語る石刻資料の復元（『日本中国学会報58』、2006年）、「王維の乗如禪師に寄せた詩とその周辺（上）（中）（下）」（『中国詩文論叢25～27』、中国詩文研究会、2006～2008年）。
 9. 注1所掲の松原論文74～75頁。
 10. 『国訳漢文大成 文学部』第5巻（東洋文化協会、1956年複版）438頁。
 11. 前野訳は『唐詩選（中）』（岩波文庫、2006年）143～144頁。斎藤訳は『中国の古典28 唐詩選 中』（学習研究社、1985年）366頁。なお、高木正一『唐詩選（中）』（朝日新書、1996年）54頁でも、具体的に「芍薬のうえこみ」と訳し、「これは当時鑑賞用として牡丹などととも庭先にうえこまれたものである」と注釈を付けている。
 12. 日野龍夫校注『唐詩選国字解』（平凡社東洋文庫、1982年）108頁。
 13. 『唐詩選詳説 上』（明治書院、1996年85版）489頁。
 14. 『唐詩選通解』（清雅堂、1993年）210頁。
 15. 『唐詩解 下』（河北大学出版社、2001年）1254頁。
 16. 『新釈漢文大系19 唐詩選』（明治書院、1997年45版）464頁。
 17. 注11所掲の岩波文庫本『唐詩選』144頁。
 18. 劉宝和『李頎詩評注』（山西教育出版社、1990年）。なお、羅琴・胡嗣坤『李頎及其詩歌研究』（巴蜀書社、2009年）の上編「李頎詩注考証」では、この二つの語に関する注釈は無い。

[2020. 9. 17 受理]

コントリビューター：富永 一登 教授（日本文学科）